平城宮東大溝 SD2700出土の黒陶片

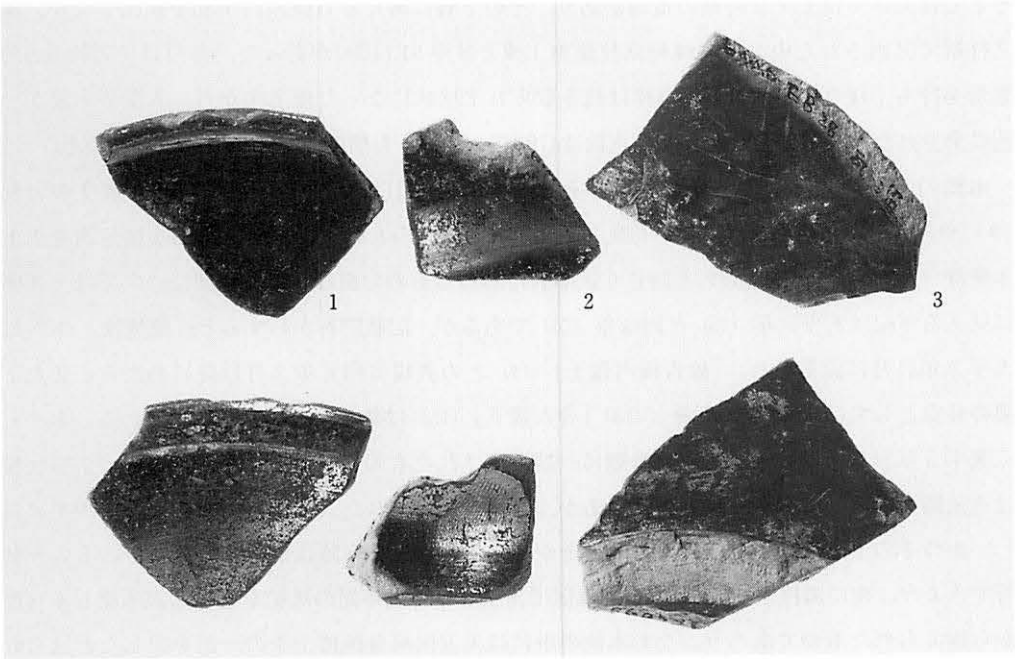
平城宮跡発掘調査部

1986年度の第172次調査で検出した基幹排水路 SD2700の奈良時代後半の堆積層から，炭素を内外面に吸着させ器表面を黒色処理した土器片（黒陶片）が出土している。いずれも水簸した緻密粘土を用いロクロで成形する。内外両面は丁寧に篦磨き調整され，光沢を放つ。硬質に焼き上がり，破面は淡灰黒色を呈す。

我国でも土器の内外両面を黒色処理する焼物は存在し，黒色土器B類と呼んでいるが，その初現は，9世紀前半代であり，風字硯や小壺などの器種が知られているにすぎない。黒色土器B類の盛行する時期は，10世紀後半～11世紀中頃であり，粘土紐巻き上げ成形で作られている。

出土した黒陶片は，時代的にも製作技法的にも我国の黒色土器B類とは明らかに異なり，渤海もしくは唐から搬入された可能性が高い。

1は須恵器杯蓋に似た破片で外面の縁部周辺には浅い沈線がめぐる。最大長3.7cm，厚さ約0.4cm。3は蓋もしくは盤とみられるもので，貼り付けによる輪状紐もしくは高台を付した痕跡をとどめる。接合を良くするためか，貼り付け面には同心円状に2～3条の沈線がめぐる。最大長4.9cm，厚さ0.6～0.9cm。2は外面に稜を有し，稜より上部が外反する破片で稜椀の可能性もある。最大長3.5cm，厚さ0.6cm。2は天平宝字年間頃のSD2700の護岸の瓦層，1・3はそれより上位の堆積層から統一新羅時代の陶質土器壺片とともに出土している。（巽　淳一郎）



SD2700出土黒陶片（上：表面，下：裏面）